

「自分は罪に対して死に、神に対して生きていると認めなさい」

ローマ6：5-11

堀田修一 23・2・19

I キリストにつぎ合わされた。「私たちがキリストの死と同じようになって、キリストと一つになっている(御霊のバプテスマによるキリストとの霊的、有機的な結合による。完了形=既に事実)なら、キリストの復活とも同じようになるからです」：5。キリストと一つとされ、キリストの死と同じようにされている。これは主を信じる私たちにとり確実な事実であり、否定しようのない恵み。それならば当然のこととして、私たちはキリストの復活にもあずかる。死を共にしたので、復活も共にする。キリストが復活されたように、私たちも復活する。キリストと御聖霊により一体、霊的に結合されているから。何という偉大な恵み！「私たちがキリストの死と同じようになって、キリストと一つになっている」を直訳すると、「キリストの死のかたち、死の有様に、つぎ合された、結合された」となる。「つぎ合される、結合される」の意味は？これは、「一緒に生まれたり、一緒に成長したり、互いに非常に深く結びついていること」を意味する。生死を共にする密接な関係を表わす。主を信じる私たちも、キリストと非常に密接な関係を持つようになった。私たちは、キリストと共に、キリストと一緒に成長していく。それは深い結びつきで、主と一体である。これが「つぎ合されて、結合される」の意味。キリストとの密接な、確固たる一体を表わす。それは主イエスが「わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です」(ヨハネ15：5)のみことばと同じ意味である。私たちは、素晴らしいキリストと一体とされたこの事実の恵みを自覚しているだろうか。キリストの死と一つにされたという意識を持っているだろうか。これこそがパウロの実感だった。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」(ガラテヤ2：19-20)。

II 古い人が十字架に。「私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減ぼされて、私たちがもはや罪の奴隷でなくなるためです」：6。「私たちの古い人」とは、救われる以前の私たちを指す。私たちは救われる前、「アダムにある者」だった。私たちはみな、罪の性質を持ち、罪の中で死んでいて、永遠の滅びの中に向かっていて。自分中心に生き、自分を誇り、神により生かされていることに気づかず、自分の力で生きていると思い上がっていた。そのような私たちのことが「古い人」と呼ばれている。この「古い人」が十字架につけられた。ここでも、不定過去時制が用いられている。これは過去において一度だけ起きたことを表わす時制。私たちの古い人が十字架につけられたのは十字架の主と霊的に繋がっているからである。私たちは、主につながっている恵みで、古い人と決別している。これは、私たちにとり、本当に大きな慰め、励まし。最も自覚すべきことは、この偉大な恵みは、信仰により受け取るべき恵みということである。「主の十字架が私の罪のため」と信じ救われるように、御霊による霊的結合の恵みにより「私は主とともに十字架につけられた」と信じる時、主と一体とされている恵みを受け取る。「私たちは、主のように実際には十字架にかかってはいない。しかし、主を信じ、御霊のバプテスマによりキリストと霊的に結合することにより、主の死と復活の恵みは私たちのものとされた。この恵みの事実は、信仰によって受け取らなければならない。私たちの古い人は主を信じ主と霊的に結合することにより、十字架につけられ、私たちは、新しい人とされている。この恵

みの事実を信じ、自覚することは、信仰の生涯にとり決定的なこと。要は、キリストにつき合されている恵みの事実です。「私たちは、いつもイエスの死をこの身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです」(Ⅱコリント4：10)。

Ⅲ 罪のからだが減び。「罪のからだが減ぼされて、私たちがもはや罪の奴隷でなくなるためです」：6。「罪のからだ」＝「古い人」。「罪のからだが減ぼされ」の意味→もしこの「減ぼされ」が、罪のからだが減ぼされてなくなるという意味なら、私たちは罪を犯さなくなるはず。しかし、すべてのキリスト者は、この地上では罪はなくなる現実があると聖書は教えている。この「減ぼされ」の原語の意味は「無力となり役に立たない」の意。主を信じる前の古い人の私たちは、罪を犯すことが普通の状態だった。私たちが罪の力に逆らえなかったから。しかし、私たちが主を信じたとき、私たちの古い人は主と共に十字架につけられて死に、葬られ、その時、罪のからだは罪に対して無力となった。だから、私たちは、主と一つとなり主によって罪と戦える。「私たちがもはや罪の奴隷でなくなる」とは→主を信じるまで、罪は、私たちを支配する主人だった。その力に勝つことはだれにも出来なかった。逆に正しいことをしようとすると、それが困難であることを体験して来た。赦さなければならないと分かっているのに、赦す事が出来ない。愛さなければならないのに愛せない。憎んではいけないのに、憎しみが沸き上がる。だから主は言われた。「罪を行っている者はみな、罪の奴隷です」(ヨハネ8：34)。しかし、今や古い人は十字架につけられた。その結果、私たちは罪から解放された。7節で「死んだ者は、罪から解放されているのです」とある。これは、罪との戦いがなくなるという意味ではなく、罪から解放され、私たちの心には、罪より強い主の支配(御国＝神の支配。主の祈り)が始まったので、罪と戦うことが出来る。「御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配(別訳「御国」)の中に移してくださいました」(コロサイ1：13)。主を信じ救われたときに、主と霊的に結合し主と共に霊的に死に、罪から解放され、御子のご支配に移された事実を信じ自覚することから、罪と戦い罪への主による勝利が始まる。

Ⅳ 認めなさい。理解の鍵は主との霊的な結合。「私たちがキリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きることに成る、と私たちは信じています」：8。主を信じた私たちは、主に結合し、主とともに死に、主とともに霊的に結合し新しいいのちが与えられ、新しいいのち(復活のいのち、永遠のいのち)に生かされている。これがキリスト者の現実の恵み！皆さんはこれを自覚し感謝しておられますか。「私たちは知っています。キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはありません。死はもはやキリストを支配しないのです」：9。私たちの救いのために、死と復活が実際に主に起きた。主は御子であるのに、死の支配する領域に入り、罪人の立場に立たれた。罪がないのに私たちの身代わりに一人の罪人になられた主が、十字架で死なれ、死に勝利し復活された。Ⅱコリント5：21に「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされた」とある。主は罪を犯されなかったが、私たちの罪を負い、罪人と全く等しくなられた。私たちの身代わりの罪人として、主は十字架で処刑された。罪のない方が「罪とされた」というみことばは、御子の贖いのみわざの深さを覚えさせられる。主の死は、全人類の罪を償うものとなった。律法の要求を満足させた。十字架で罪が償われ、主の復活は罪が完全に償われた結果。死は主を信じる私たちを支配することが出来なくなった。「なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです」：10。「同じように、あなたがたもキリスト・イエスにあって(霊的に結合して)、自分は罪に対して死んだ者であり、神に対して生きておられる者だと、認めなさい」：11。これは大切なみことばである。私たちが認めるので事実となるのではなく、「主と霊的につながり主にあって罪に死に、神に対し

て生きている」恵みが事実だからそれを事実として認めその恵みに生きる。「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです」ガラテヤ2：20。

祈り：主を信じ、主と霊的に結合し、つながり、主と共に死に、主と共に新しいいのちに生かされている恵みを感謝します。